

文学部

文学部生のリアルな学生生活

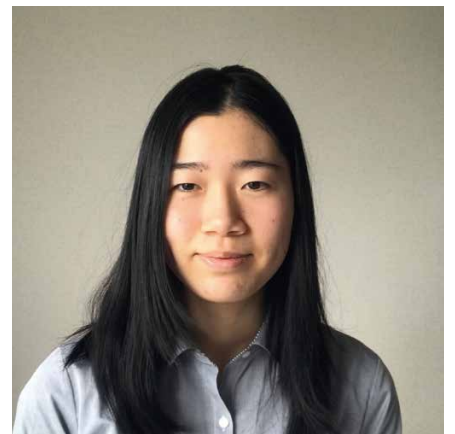
Vol.35

文学部生のリアルな学生生活の様子を掲載し、ご父母の皆さまに文学部生の充実したキャンパスライフの風景、また文学部ならではの取り組み等の情報を発信いたします。

コロナ禍、オンラインの1年間と 対面授業の1日

文学部人文社会学科哲学専攻2年
学校法人角川ドワンゴ学園N高等学校出身

もりみき
森美樹



この1年、新型コロナウイルスによって、大勢の人々の日常が変わり、大学生もオンライン授業を余儀なくされました。私自身も入学後、期待していたキャンパスライフを送ることは叶わず、自宅でオンライン授業を受けるばかりの1年間を過ごしました。ここでは、私のオンライン授業すくめの1年間と、2年生になって初めて対面授業を受けた1日の感想をお伝えしたいと思います。

まず最も大変だったのは課題です。特に、前期はその多さに目が回りました。課題が出るとうmamba（授業支援システム）にある鉛筆マークが赤くなります。これを「赤鉛筆」と呼んでいます。毎日2つ、3つ新しい課題が出され、常時ほぼ7本の「赤鉛筆」を抱えていたため、「課題やらなきゃ」という文章をそれぞれ赤鉛筆でひたすら書き殴っている夢まで見ました。その後、文学部長から課題量の緩和について連絡があったそう、課題の量が減って期限も延び、日々の負担は軽減しました。レポートを書くことに慣れてきたこともあってか、少しずつ生活に余裕が出てきました。また、受講や課題のために1日中パソコンを見ていたせいか、左目がたまに痙攣するようになりました。気付いたら左目だけでは3メートル先にある本の背表紙すらぼやけて読めなくなり、視力が落ちたことにショックを受けました。

さらに、借りたアパートを1度も使わ

ないまま解約したり、通信環境が悪いせいでリアルタイム形式の授業の音声聞き取りづらく質問がしにくかったり、同級生と交流が取りづらかったりといったデメリットも経験しました。

しかし、あらためてこの1年を振り返ってみると、意外にも楽しいことがあったと気付きました。ここからは心に残った授業や出来事をいくつか紹介します。

最初に紹介するのは、「哲学基礎演習」です。この授業は哲学専攻1年生の必修科目であり、演習1では西洋哲学を英文で、演習2は東洋哲学を漢文で勉強しました。同じ専攻でもクラスによって受ける演習の内容が異なり、私が受講したのは、村上先生のプラトンからデカルトまでの古典的テキストを読んでいく演習1と、水上先生の古事成語について典故となる漢文から分析していく演習2でした。まったく知らないかった古事成語だけでなく、既知の内容についてもさまざまな背景を知ることができ

たため興味深い授業でした。ほぼ毎回全体講評があり、途中からは生徒のレポート一覧も配布されました。自分のレポートに対するフィードバックがあったときはとてもうれしかったですし、ほかの人の新たな視点や的確な表現で書かれたレポートを読んでは「こんなすごいレポートを書く人が同じクラスにいるのか」と驚き、大いに刺激されました。そして、レポートにもっと力を入れて取り組むようになりました。

続いて印象的だったのは、中村先生の「英語表現」です。この授業は、人種差別や移民身体障害など、社会問題とかわりのある映画を取り扱う授業で、学年末に英語でグループごとのプレゼンテーションを行いました。後期は毎週20分ほどグループで話し合う時間が設けられ、そこでプレゼンテーションの方向性を決めました。私たちのグループは、冬休み期間中に各自で原稿を仕上げ、英語でのプレゼンテーションが成功したときには達成感がありました。ほかの

二〇二一年度

中央大学入学式

於 第一体育館





グループのプレゼンテーションから学ぶことも多く、とても良い経験になりました。

ほかに、課題量は多いものの面白い先生なので毎週楽しみにしていた「英語読解」や、ユーモアたっぷりで現代美術家でもある先生による「文化人類学」をはじめ、「科学史」「国際政治学」「体育」など、すべての授業に思い出があります。

哲学専攻の大川先生が去年夏にZoomで開催してくださった「友だち作り会」もとても楽しかったです。その際、何人かと連絡先を交換することができましたし、同級生の顔を何となく覚えることもでき、初めての対面授業（後述）では同じ専攻の人に話し掛けることができました。太田先生と大原先生が開催してくださった夏休みの読書会も、参加者が少人数で質問しやすく、それに対する先生方の見解を伺うのが楽しみでしたし、その知識や視点の深さにあらためて圧倒されました。

実は、この文章を書いているのは4月で、

哲学基礎演習

(1)



哲学基礎演習

(1)



manabaの時間割に課題が出た時の赤鉛筆

ちょうど昨日、大学入学以来初めて従来の対面授業を受けました。授業自体がとても楽しかったですし、キャンパスで授業を受けられること自体がとてうれしかったです。Oral communicationで2人1組になって英語を話す練習をしたり、興味があったものの1年次で受講できなかった中村先生の「哲学基礎演習1」の授業を現1年生に混じって聴講したり、同じ授業を受けた人と話をしたりすることが本当に楽しかったです。これが、新型コロナウイルス感染症拡大以前のキャンパスには当たり前であった風景で、私たち2年生はこれまで見る事ができなかったものなのだと思います。

今、振り返ってみると、先生からのフィードバックやグループワークが楽しかったのは、オンラインではあるもの先生や同級生とコミュニケーションが取れる数少ない機会だったからだと思います。この1年、私はきつとコミュニケーションに飢えていたのです。

これからの大学生活がどうなるのかわかりませんが、コロナ禍でも悔いが残らないよう、日々を大切に過ごしていきたいと思っています。

文学部だより

「困った」を「自己理解」のきっかけに

文学部事務室 細見麗子

こんにちは。文学部事務室で学生の学修や大学生活についての相談を受けておりますキャンパスソーシャルワーカー（CSW：臨床心理士）の細見と申します。

昨年度の相談傾向の特徴として、新型コロナウイルスの影響による外出制限やオンライン授業により、授業内外で友人や教員と思うように交流できず、不安や孤独感、閉塞感に悩む相談が多くありました。また、オンライン授業というパソコンでの受講は、ITスキルに加え、情報の取捨選択やタスク・スケジュール管理等の「スキル」が求められるため、オンライン授業の副次的な部分で困難を感じた学生も少なくなかったようでした。その一方で、対人緊張の強い学生においては「対人接触の少ない」学修環境に少し安堵し、集中して学業に取り組めたという側面もありました。

「何か困った」ときにそれと向き合うことは、得意・不得意を含め自分の考え方・物事の捉え方の傾向を知るなど「自分を理解する」きっかけとなります。そして、そうした

「自己理解」は学修や生活面での問題解決・対処のスキルにつながり、また卒業後の人生を生きるための力にもなります。もし、ご子女が何か「うまくいかない」「困ったな」「行き詰まっている」と感じているのをお見掛けになりましたら、是非相談を勧めていただければ幸いです。

文学部には事務室所属のキャンパスソーシャルワーカーが2名おり、相談対応と同時に学部内で教職員と連携を図ったり、学修環境の調整をしたりしています。また学生相談室（5号館）でも大学生活全般についての相談を受け付けており、こちらは必要に応じて学生相談室所属の精神科医との連携が可能です。

大学生のときにこそ、「困った」を力に変える経験をたくさんしてほしいと思っています。ご希望の方は、文学部事務室を通じてご相談ください。